

日常のすぐそばにある、新しい社会への入口

SDGs未来都市の暮らしかた

令和6年、清瀬市は地方創生担当大臣より「SDGs未来都市」として選定証を授与されました。多摩26市の中では3番目の選定。日常のすぐそばにある取り組みを紹介します。

台所からつながる資源循環 廃食用油の回収

7
12 13

家庭から出る廃食用油をリサイクルする取り組みが始まりました。清瀬市はENEOS株式会社、株式会社吉川油脂と協定を結び、専用リターナブルボトルを使用した回収を実施。これまで、ごみとして出していた油を資源として再利用します。回収された油は石けんやインク原料などに活用され、将来的には再生可能な航空燃料（SAF）の原料にも使われる予定です。清瀬市のこの取り組みは全国で3例目。回収方法は、冷ました油を専用ボトルに入れてふたを閉め、市役所などの回収ボックスに持参するだけ。対象は植物性の食用油で、マヨネーズや動物性油などは不可。身近な行動から、脱炭素社会への一歩につながります。



繰り返し使用可能な専用ボトル
(リターナブルボトル)

回収用ボトル及び 廃食用油回収ボックス設置場所

清瀬市役所1階（駐車場最寄り入口）	清瀬市中里5-842
松山地域市民センター	清瀬市松山2-6-25
野塩地域市民センター	清瀬市野塩1-322-2
下宿地域市民センター	清瀬市下宿2-524-1
中里地域市民センター	清瀬市中里4-1301
中清戸地域市民センター	清瀬市中清戸4-847-5
竹丘地域市民センター	清瀬市竹丘1-11-1
清瀬けやきホール	清瀬市元町1-6-6
コミュニティプラザひまわり	清瀬市下清戸1-212-4

堆肥から始まる地域の恵み 都市農業と 耕畜連携

2 12
13 15

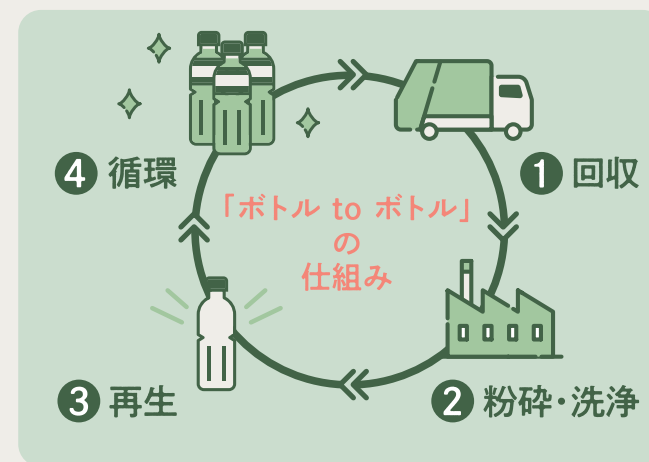
清瀬ひまわりフェスティバルが行われる農地（石井ファーム、小寺ファーム）では、毎年、冬から牧草の栽培が始まります。市内には5軒の牧場があり、「東京牛乳」や、フレッシュチーズ（more! KIYOSE No.4で紹介）の原料となる生乳の産地となっています。近年、原油価格や為替変動の影響で飼料費が高騰していることから、清瀬市が仲介し、市内で牧草を生産する取り組みを始めました。ひまわりは緑肥として牧草の肥料に、牧草を食べた乳牛のふんは堆肥として、再びひまわりや野菜の栽培に活用されます。このように、畑作農家と酪農家が連携し、地域内で資源を循環させる仕組みを「耕畜連携」といいます。限られた都市農地を活かし、酪農が盛んな清瀬市ならではの特色を生かした、持続可能な農業モデルです。

清瀬市では、SDGs未来都市としての責務のもと、今年度から堆肥を活用する農業者への補助制度を開始。農業者の負担を軽減するとともに、野菜や果樹などの畑作農業と酪農業との連携、さらに落ち葉や剪定枝などの地域資源の活用を進め、自然資本の循環と生産性向上の両立を目指しています。



脱炭素社会への小さな一歩 「ボトル to ボトル」 水平リサイクル

12
13



「ボトル to ボトル」は、使用済みペットボトルを再び飲料用ボトルに再生する、循環型の水平リサイクル。ペットボトルのキャップとラベルを外し、中をすすいで出していただくことで高品質な再資源に。石油由来の新規資源使用を抑え、CO₂排出削減にもつながります。脱炭素社会を目指す、日常に根ざした取り組み。きれいに分けて出すことが、資源の循環を支えます。

小さなしくみが、未来を動かす 清瀬市が目指す、 持続可能なまちづくり



清瀬市では、資源循環を通じた環境保全など、身近な暮らしの中からSDGsの実現に取り組んでいます。SDGs（持続可能な開発目標）は、国連が定めた2030年までの17の国際目標で、世界共通の課題に向けた行動指針です。清瀬市のまちづくりは、その6つの目標と深く関わっています。

ごみ収集から脱炭素へ 燃料電池ごみ収集車

7
11 13

水素を燃料とする「水素パッカー車」の試験運用が清瀬市でスタート。走行時にCO₂を排出せず、静音性にも優れた次世代型の収集車です。市民に最も身近なごみ収集を通じて、脱炭素社会への転換を着実に進める取り組み。持続可能なまちづくりが、静かに動き出しています。

